

## 地域子育て支援拠点研修事業<滋賀開催>

### 《開催概要》

- 開催日 平成24年10月28日(日) 10:00~16:30
- 会場 滋賀県立男女共同参画センター G-NETしが
- 主催 財団法人こども未来財団・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援 厚生労働省・(社福)全国社会福祉協議会・滋賀県・近江八幡市  
(社福)滋賀県社会福祉協議会
- 協力 滋賀子育てネットワーク
- 参加者数 158名(男性16名 女性142名)  
(行政75名 NPO・任意団体48名 その他団体16名 その他19名)

### 《プログラム》

- 主催者挨拶 岡林 一枝さん (財団法人こども未来財団 事業部 参事)
- 開催地挨拶 大谷 雅代さん (滋賀県健康福祉部子ども・青少年局長)



岡林 一枝さん



大谷 雅代さん

### ■プログラム1 基調講演

「地域子育て支援拠点事業における活動の指標『ガイドライン』について」

講師 渡辺 顕一郎さん(日本福祉大学 教授)

はじめに、この「ガイドライン」が作成されるまでの経緯についてのお話があり、地域子育て支援拠点事業における4つの基本事業

- ① 親子の交流の場の提供と交流の促進
- ② 子育てに関する相談・援助
- ③ 地域の子育て関連情報の提供
- ④ 子育て・子育て支援に関する講習の開催

についての説明がありました。



渡辺 顕一郎さん

それから、日本の青少年は、自分をダメな人間だと思っていたり、孤独だと感じていたりする割合が、世界でトップであるという複数の報告があるが、この自己肯定感の低さは、幼い頃からの経験の積み重ねであると考えられるということ。昔に比べて、現在は世代間のタテのつながりも、地域のヨコのつながりも希薄なため、子どもの社会関係も希薄になり、子どもが孤立してしまう傾向が高まっているということ。わが子を守ることに必死な母親の「先回り育児」により、子ども自身の他者への関心や交渉能力の育ちがそがれてしまっていること。子育てに自信やゆとりのない母親による母性の希薄化や、仕事であまり育児に関われない父親による父性の希薄化も問題視されているということ等を指摘されました。

そんな現状の中で、地域子育て支援拠点の支援者には、

- ・ 温かく迎え入れる
- ・ 身近な相談相手であること
- ・ 利用者同士をつなぐ
- ・ 利用者と地域をつなぐ
- ・ 積極的に地域に出向く

といった役割が求められています。私たち子育て支援者は、初めてひろばに来る親が、様々な不安を持ちながら勇気を出してやって来るのだということを胸に刻んで、常に利用者を温かい心で迎え、親の育児負担を少しでも軽くすると共に、子どもたちの健やかな発達のお手伝いをしていきたいと感じました。

## ■プログラム2 災害対策ガイド「備えの123」について

釘町 千明さん（NPO法人子育てひろば全国連絡協議会）

子育てひろばの危機管理の知恵や、これまでの震災の体験談をもとに、ひろば全協が作成した子育てひろばのための災害対策ガイド「備えの123」について説明がありました。



釘町 千明さん

### 備える 1 ひろばの中で ～準備・点検と話し合い～

施設内の安全点検は定期的に行いましょう。非常用持出品として何が必要か考えましょう。災害時にスタッフ全員が揃っていなくても対応できる体制を作っておくこと、避難経路をスタッフ全員で確認しておくこと、スタッフも被災することを忘れず、家族で話し合っておくことなども大切です。

### 備える 2 その時、慌てないために ～避難訓練とマニュアル作り～

災害時には、まずスタッフが慌てず落ち着いて行動することが肝心。日ごろから様々な災害を想定して避難訓練マニュアルを作成し、避難訓練には利用者さんにも参加してもらいましょう。消防署員にプロの目でアドバイスしてもらうのも有効です。

### 備える 3 ひろばの外と ～連携と助け合い～

災害時の対応は、ひろばだけで判断せず、まずは行政としっかり連絡を取ることが肝要です。ただし行政も被災するので、連絡が取れない場合の対応についてもあらかじめ話し合っておきましょう。遠方の団体といざという時に助け合える体制をつくっておくことも有効です。利用者さんには、乳幼児用の物資は手に入りにくいので3日分は備蓄しておくことなどを啓発しましょう。ひろばは被災した親子の心の拠り所になります。いざという時に1人でも多くの人命を助けられるようにスタッフを支える体制づくりも大切です。

## ■プログラム3 基調報告 「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

講師 巢瀬 博臣さん（厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課 少子化対策企画室）

最初に、これまでの子育て支援対策の経緯や「子ども・子育てビジョン」について説明がありました。具体的な数値目標の1つには、平成21年度に約7100か所だった地域子育て支援拠点を10000か所に増やすことが挙げられています。今後は、地域子育て支援拠点事業に、地域の子育て資源に精通した「子育て支援コーディネーター」（仮称）を配置し、利用者を支援していくことも検討されていきます。



巢瀬 博臣さん

また来年4月からは、様々な立場の人々が子育て支援の政策プロセス等に参画・関与することができる、「子ども・子育て会議」を設置する予定です。(市町村等の合議制議会の設置努力義務)

今後、消費税率の引き上げによる収入のうち、約0.7兆円を子ども・子育て支援の充実のために使用する計画であるが、幼児教育・保育・子育て支援の質・量の充実を図るには1兆円超程度の財源が必要で、政府はその確保に最大限努力するという説明もありました。

## ■プログラム4 分科会

### ＜第1分科会＞「拠点スタッフの役割、拠点スタッフに求められる力」

【コーディネーター】柴田 恒美さん（NPO法人子育て談話室 理事長）

【事例報告】 石井 智子さん（NPO法人高槻子育て支援ネットワークティピー 理事長）

【事例報告】 鹿田 由香さん（滋賀子育てネットワーク 代表・  
一般社団法人育児ひろばアプリコット 代表）

前半は事例報告をお聞きし、後半はグループワークを通して「スタッフの役割」「求められる力」について考えました。

事例報告の石井智子さんからは、ひろばは「子育ての社会参加の初めての一步」「地域とのつながりの入口」「通過する場所」であり、子どもが友だちを作ったりスタッフが一緒に子どもを見守ることで安心感を持てたり、世代間交流をしたり、ひろばに行くことで子育ての悩みを解決していく場所であるという話がありました。そして、スタッフの雰囲気、それぞれのひろばの違いをつくるという指摘もいただきました。



石井 智子さん

鹿田由香さんは、自分たちで情報誌を作るという活動から始まり、子育ての大変さから、母親の居場所づくりの必要性を感じ、つどいの広場や親子カフェ風子育てひろばを開設されました。情報・発信に力を入れていて、チラシは興味を持ってもらえるようにカラーで見やすいものにしたたり、行政と連携して訪問時に渡してもらったり、メールやブログでの情報発信もされています。そして、社会に向けても子育て家庭に今、必要なことは何かということも発信されているというお話でした。



鹿田 由香さん



後半は、コーディネーターの柴田恒美さんを中心に、スタッフの役割「求められる力」をテーマにしたグループワークをしました。「スタッフの役割」としては、ほっとできる雰囲気作り、笑顔で接すること、話を聞くこと、情報提供、安全な環境作り、利用者同士をつなげる役割、地域との連携など、「求められる力」では、利用者同士をつなげる力、スタッフ間の連携、コミュニケーション能力、親しみやすさ、子育てについての情報と知識などの意見が出ていました。

最後に活動の指標「ガイドライン」の中の「支援者の役割」を読み、気づきや感想を発表しました。スタッフの役割を再確認することで、改めて、ひろばの重要性を感じ、それぞれのひろばの情報交換ができたことで、今後の活動のヒントを得ることが出来た分科会でした。



## <第2分科会>「拠点と地域の連携で深める子育て支援」

【講師】 山下 憲昭さん (大谷大学 教授)

【事例報告】 川村 節子さん (滋賀県愛荘町子ども支援課 課長)

【事例報告】 今堀 直子さん (青空保育まつぼっくり 代表)

【事例報告】 他谷 恵津子さん (特定非営利活動法人子育てネットワーク志賀うりぼう 理事長)



山下 憲昭さん

まず最初に、講師の山下憲昭さんから、地域で子育てを支えるということは理屈ではなく、地元の人が心を寄せ合う、地域で子育て家庭を見守るということが必要だというお話があり、その後、3名の事例報告がありました。後半は、参加者からの質問票に対してパネラーが答えた後、パネラーのコメントと、山下さんからの講評がありました。

事例報告では、川村節子さんから、愛荘町の現状と課題、子育て支援センター「あっこ」の設置に向けて就学前保護者にアンケート調査を実施したことや、乳児期の育児不安予防として保健と福祉が連携して妊娠期からのサポートが行われていること、ブックスタート事業、外国籍住民の子育て家庭の支援についての紹介がありました。また地域の中で子育て支援の輪が広がるように、主任児童委員と共に地域に出向く出張ひろばの開催や、子育て中の親たちが編集委員となって作成した「愛荘町子育てハンドブック」についても紹介されました。



川村 節子さん

今堀直子さんからは、保育士としての経験のあった自分が、自身の子育てで不安を経験する中で、子育て支援の必要性を感じ、自宅開放を経て、青空保育「まつぼっくり」を立ちあげた経緯についてのお話でした。現在は拠点を持ち、活動の幅を広げられている今堀さんですが、子どもたちの仲間づくりや子育ての場の提供とともに、母親自身も自分の時間を大事にしてほしいという思いから、母親の声を聴くグループワークの時間も作



今堀 直子さん

られています。今後の課題は、特に自分の居住地ではない学区での活動なので、自分たちの活動をどのようにして地域に知ってもらうか、どうしたら地域の人とつながっていけるかということ、市民活動として活動しているが、行政の子育て支援関係課とどのようにつながっていけばよいか、また、運営面での事務的なことを整えることだということでした。立ち上げ当初、今堀さんと一緒に活動されていた方から、預かる子どもの低年齢化が進み、親子分離したい親が増えてきていると実感しているというご意見もありました。

他谷恵津子さんからは、旧志賀町が大津市と合併することになった時に、「子育て中の親の声を行政に届けたい」という思いで、旧志賀町内の育児サークルの代表者に呼びかけ、子育てネットワーク志賀を設立した経緯と、子育て中の親子が集まれる場の提供を大津市に陳情したことがきっかけとなって、2008年4月から、「木戸つどいの広場 にじっこ」を運営するに至ったことについてのお話がありました。



他谷 恵津子さん

地域との連携については、2009年に子育てシンポジウムを民生委員児童委員さんに声かけをして地域で開催したこと、つどいの広場「にじっこ」に地域の人により多く関わってもらうために、情報発信の工夫をしていること、また行政とのつながりを持つために、大津市や滋賀県の委員などを受け、各種会議の席で子育て家庭の声を届けたりしていることが話されました。「にじっこ」を地域の母親の働く場としても考えていきたいということ、制度政策の隙間で行政の手が付けられない支援ののりしろの部分、NPOとしてどのように取り組んでいくかが今後の課題であるということでした。後半のディスカッションでは、父親の参加について、預かり保育での母子分離について、保護者支援について、運営費についてなど、質問票での参加者の質問がありました。



### <第3分科会> 「地域子育て支援拠点の役割を行政と共に考える」

【講師】 渡辺 顕一郎さん (日本福祉大学 教授)

【事例報告】 川寄 孝さん (彦根市福祉保健部次長・彦根市福祉事務所長)

【事例報告】 四井 羽須美さん (揖斐川子育て支援センター 所長)

【事例報告】 安田 典子さん (NPO法人くすくす 理事長)

前半は、渡辺顕一郎さんのお話と、川寄孝さん、四井羽須美さん、安田典子さんの事例報告がありました。渡辺さんは、「地域子育て支援事業における活動の指標『ガイドライン』」より、地域子育て支援拠点とは、基本事業であるひろば型、センター型、児童館型に加えて、支援者が地域に出向いて行き、顔を知ってもらうことの大切さも話されました。



続いて、彦根市の川寄孝さんは、行政の担当者として、支援活動者の方々と横につながって話し合い、そこから生まれてきた計画と、計画策定の経過を報告されました。行政がすべきことは場所と人の提供。民間（支援活動者・当事者等）と同じ方向を見ていくことが大切であり、支援を利用した親の中から次の支援者をしっかり育てていくことが課題と話されました。

四井羽須美さんのお住まいの揖斐川町は、町村合併により広大な面積の町となりましたが、山間地も含まれ、対象児童が点在している状況でした。そこで、町内1カ所の子育て支援センター【公設公営】職員が出かけて行き、センターの存在を知ってもらうことからスタートし、今では、母親を中心にいろいろな活動が展開されているということでした。また、町内関係機関との連携や地域の人々とのふれあいも大切にされています。「自分たちの生活のために、町民自ら、また行政と協働で行動する」そんな力がセンターを拠点に生まれて育ってくれることを願っておられると話されました。

安田典子さんからは、大垣市の郭町商店街の空き店舗を利用して、まちの誰もが立ち寄ることができ、子育て中の親子の日常の延長上にある安心して集える場、ここに関わるすべての人が「育ち合う」場を目指してひろばを営んでおられる活動についての紹介がありました。

後半は、グループワークが行われました。子育てをめぐる問題に対して、子育て支援拠点における支援、行政（役所、保健センター、児相）の役割、民間（住民組織、NPO、ボランティア）の役割についてどのような検討課題があるのか、参加者が8グループに分かれ、それぞれ模造紙に意見を書き込み、他のグループの意見も見て回りました。



最後に渡辺顕一郎さんは、厚生労働省が計画している、有識者、地方公共団体、事業主代表、労働者代表、子育て当事者、子育て支援当事者等が、子育て支援政策のプロセスに参画関与することができる仕組みとしての「子ども・子育て会議」の設置が最も重要であると締めくくられました。

子育て支援事業も、いよいよ外の団体、地域、行政へと大きく関心が広がってきたことを強く感じた分科会でした。

## ■プログラム5 全体会（分科会総括・ディスカッション）

【コーディネーター】鹿田 由香さん（滋賀子育てネットワーク 代表・  
一般社団法人育児ひろばアプリコット 代表）

【第1分科会】 柴田 恒美さん（NPO法人子育て談話室 理事長）

【第2分科会】 山下 憲昭さん（大谷大学 教授）

【第3分科会】 安田 典子さん（NPO法人くすくす 理事長）

### ●第1分科会（柴田さんより）

石井さん、鹿田さんの事例報告の後は、7グループに分かれて、スタッフの役割と求められる力について話し合いました。その中でそれぞれが気づきを高め、日ごろの活動を振り返ることができました。その後、グループごとにガイドラインの「支援者の役割」を読み合わせ、1人ずつ、感想と明日からどうするかを述べて締めくくりました。

### ●第2分科会（山下さんより）

川村さん、他谷さん、今堀さんの事例報告の後は、質問票を書いてもらって、それに3人が答えていく形式を取りました。知りたいことが具体的にわかる、有意義な時間を過ごせました。

### ●第3分科会（安田さんより）

川崎さん、四井さん、安田さんの事例報告の後は、8グループに分かれて、まず子育てをめぐる問題を挙げ、それぞれの問題について、支援拠点ができること、行政ができること、民間組織ができることを考えました。他のグループの内容を見る時間を設け、課題の捉え方がグループによって違うことも感じました。「ではわが町の課題は？」という意識で、いろいろな立場の人が問題を共有して話し合う、「子ども・子育て会議」が、それぞれの場所で活発に行われるよう願っています。

最後に、コーディネーターの鹿田さんからの「ここで学んだことをそれぞれの拠点に持ち帰って、皆で共有できるようにしましょう。これからも点で終わらず、線、面でつながっていけるような子育て支援を目指していきましょう。」という話で全体会が締めくくられました。

